

虹と日本文藝 (十) 続

——日本辞類書等をめぐって (2) 近・現代編

萩野恭茂

小序

本稿は、「虹と日本文藝」(十)——日本辞類書等をめぐって・古典編——に続くもので、その近・現代編である。最後に前稿資料を含めた鳥瞰をなしつつ「通考」を記す。なお、70は、辞書としてはやや専門的というか、片よった内容のもので、一括して資料70の枠に入れた。

近・現代

61₂

虹をいふ丹の義のすぢの反也又白虹も見ゆ日本紀にぬるふ黄葉集にのさといふも皆通音也今も東國の俗にのさといふと靈異記に電をよめり埃糞抄に虹ををに本寛をぬにといふ事あり博聞錄に虹寛但是雨中、日影也と見えたり又霖雪錄にの蝶餘の吐し氣也といふ備中の岡氏かゝりしをまのあたり見しと語れり虹蜺の字虫に从ふもさる事にも西國にてゆふふといふ夕虹の略にも○俗ににを言にかけたるにをを帯せたるといふ二字の義也實名二字の多きをもち二字とより古事談明月記なるに見えたり又名のりのかた字を他人につかひすを二字といひし事大諸禮に見えたり

私註 (一) 『増補語林 倭訓栞』(二) 中巻「にむ」(三) 国語辞書 (四) 江戸時代中期～明治時代中期 (五) 谷川士清編、井上頼圀・小杉楯郎増補 (六) 『増補語林 倭訓栞』(七) P. 685 (八) 全九十卷、八十二冊。前編 (一～四五) は安永六年(1777)・文化二年(1805)・文政十三年(1830)の三次にわたり刊行。中編(四六～七五)は文久二年(1862)刊。後編(七六～九三)は明治十年(1877)年刊。た

だし、本書は、後編をすべて省き、伴信友の加筆と増訂者の増補とを上欄に加えてある。わが国最初の近代的な国語辞書。『国語学辞典』所収・山田忠雄筆文による)

〔考〕本書には、(にじ)の部分に関し増補・加筆の部分がない。ということとは、(にじ)に関しては、谷川士清の情報に、その後井上・小杉・伴、共、付け加えるべき新しい情報は何もなかった——と言える。〔61〕参照。本書は内容的には近世であるが出版年によって近代初頭に入れた。文藝家の教養への影響資料の一端として意義がある。

66

虹霓○虹霓者、乃空中雨氣、映照日光而成、形分七彩、即日光之本也。朝西而暮東、常與日相對照、有現一道者、有現兩道者、二道四道亦間有之、或以爲龍形而分雌雄、或以爲神物能吸飲食、此皆滑稽之言、君子勿道。

私註 (一)『博物新編』(二)一集「光論」(三)博物学書(四)明治七年(五)英国医士合信(六)『博物新編』(官許・福田氏蔵梓〔七〕P 46

〔考〕資料〔60〕の系譜にあるが、内容的には更に「科学的」見解が進歩している。因みに「兩道」は(副虹)いわゆる(二重虹)、「三道」「四道」等は(反射虹)のことであろう。

67

にじ(虹霓) 丹白ノ意カトイニ古ク又スビ。太陽ノ光ノ大氣中ノ水氣(雨)ニ映リテ七色紫紺青緑黄柑赤ヲカラハスモノ、朝ニ西天ニ見ハレ、暮ニ東天ニ見ハル。

私註 (一)稿本日本辭書『言海』(二)にじ(三)国語辭書(四)明治二十四年完(五)大槻文彦(六)山田俊雄編『稿本日本辭書言海』第三卷(昭54、大修館書店)(七)P 11(八)原本||宮城県図書館所蔵本

〔考〕「霓」「蜺」に古意の残滓(ニジを動物的に見て「雌」と観ずる)を残し、「丹白ノ意カトイ」は〔67〕の系譜、不審。「古ク、又ヌジ」は誤記であるが、上代特殊仮名遣研究成果発表以前であるので仕方ない。ただし方言としては存在(〔67〕)。以下単純であるが科学的記述。

なお本稿本は、明治二十四年四月二十二日、日本辭書『言海』第四冊(つ以下)として出版された。それが次のものであるがまったく同文である。

にじ(虹霓) 丹白ノ意カトイニ古ク又ヌジ。太陽ノ光ノ大氣中ノ水氣(雨)ニ映リテ七色紫紺青緑黄柑赤ヲカラハスモノ、朝ニ西天ニ見ハレ、暮ニ東天ニ見ハル。

にじ 虹(名)「三」日光が、空中に浮遊せる無数の水滴に直射する時、水滴内に於て、反射と屈折とをなし、分散せらるるによりて生ずる弧状の色帯。實は圓形なれども、その一半は、地平線下に隠るるにりよて、弧状に見ゆ。太陽と反對の天空に現れ、外環の赤色より、橙・黄・緑・青・藍の順序に排列し、内環の紫色に終る。時としては、普通の虹の外側に、別に、色一層薄くして、その順序全く反對なる虹の生ずることあり。これ日光が、水滴中にて二回反射して生ずる現象にて、前者を第一の虹、後者を第二の虹といふ。蜺蜺(フジ)。夫木「雨はるる峰の浮雲うき散りて虹立ちわたる冬の山里」

虹の梁(カサ)「句」こりやう(虹梁)の直譯。太平記「風の巻(カサ)、天に翔り、虹の梁、雲に姿ゆ」

虹の帯「句」虹を帯に擬へて、いふ語。善の「松」霞の袂、虹の帯、雲の上著もゆりかけて」

虹の如し「句」意氣氣儀の盛んなる形容。「氣を吐くこと、虹の如し」

虹ふく「句」虹立つと同じ。出雲集「雨はれて入口の空に虹ふけば肌身寒しも谷の夕風」

私註(一) 日本大辭典『言泉』(二)にじ(三) 国語辭書(四) 昭和二年(五) 落合直文著・芳賀矢一改修(六) 『改修言泉』第四卷(昭2、大倉書店) (七) P 3375

〔考〕語の解は科学的。よつて故事・俗信・ことわざ系(cf. 70) は見られない。これと関連してか、「霓」(ニジの雌とみる) はカット。そして中国古代北方系の「蜺蜺」を付加。「句」中「虹ふく」を參入。「張る」はない。なお、「虹の帯」の解は如何。喩が逆。

にじ 虹(名)「理」日光が雨滴のために分散せられて生ずる弧状の色帯。太陽と反對の天空に表はれ、弧の中心は眼と太陽とを連ぬる直線上にあり。赤は外環を蒸色は内環をなし、橙・黄・緑・青・藍の諸色は其の間に排列す。視半徑は約四十一度なり。時としては之よりも色薄く、色の順序全く反對なる色帯の表はるることあり。和名ニ虹。毛詩注云、蜺蜺(蜺亦作虹也。衆名苑云、虹一名蜺(蜺亦作虹也)の東阿小(蜺亦作虹也)電記上

私註(一) 『大日本國語辭典』(二) 第四卷―にじ(三) 国語辭書(四) 大正八年十二月十八日初版發行、昭和四年四月十八日修正版發行(五) 松井簡治・上田萬年共著(六) 修正版『大日本國語辭典』(昭4・4・18、富山房) (七) P 20

〔考〕解は科学的。古典よりの引用例は古書よりの引き写しにて新

味なし。本書は修正版によつたが、初版に遡れば大正八年となり
68の前に位置することになる。

70.

- (1) 二月虹(虹)を西(西)に見(見)れば五穀(五穀)の価(高)高(高)し。陰曆二月、西空の虹を凶作の前兆とする俗説。
- (2) 三月、虹(虹)を見(見)れば米(米)の価(高)魚(魚)の価(高)より高(高)し。三月に虹を見た年は、魚は大漁で、米は不作であるという意。
- (3) 四月に虹(虹)を見(見)れば五穀(五穀)の価(高)高(高)し。四月の虹は凶作の前兆という。
- (4) 五月虹(虹)を見(見)れば麦(麦)の価(高)高(高)し。五月に虹が発生すれば、その年の麦は不作で値が上がる。天候に関する俗説。
- (5) 六月虹(虹)を見(見)れば麻(麻)の価(高)高(高)し。陰曆六月の虹は麻の不作の前兆である。
- (6) 十二月(陰曆)虹(虹)を見(見)れば米(米)の価(高)高(高)し。十二月に虹が立つと翌年は凶作になるという俗説。
- (7) 朝の虹(虹)には川越(川越)えするな、宵(宵)に立(立)つ虹(虹)は日照(日照)り、朝(朝)虹(虹)が出る。昼間は天気が悪くなって川越えするは危険である。逆に、夕方虹が立つと翌日は良い天気めぐまれる。(越中地方の俗説「風俗画報」二七九号)
- (8) 夕方虹(虹)が立(立)つたときは晴(晴)れ(山口県柳井付近の天候に関する俗説「郷土研究報」一七号)

- (9) 晩の虹(虹)は江戸(江)行(行)け朝(朝)の虹(虹)は隣(隣)へ行くな。夕方虹が出るのは晴れの前兆で江戸まで遠出もできるが、朝の虹は雨の前兆だから近くでも外出しないほうがよい。
- (10) 晩の虹(虹)は鎌(鎌)を研(研)げ、朝(朝)の虹(虹)は隣(隣)へ行(行)くな。夕方の虹は晴天の前兆だから、翌日働く準備をせよ。朝の虹は雨天の前兆だから外出はしないほうがよい。前項と同類。→朝虹(虹)は雨、夕虹(虹)は晴れ。
- (11) 東山に虹(虹)がかれば晴(晴)れ、西山(山)に虹(虹)なれば雨(雨)。(長野県伊那地方でいう)
- (12) 虹が川(川)をはさんで立(立)つと雨(雨)。(播州赤穂地方の俗説及び俚諺)
- (13) 虹の川越(川越)しは雲(雲)。(虹が川をはさんで立つのは雲の前兆。〔槍枝岐民俗誌〕)
- (14) 虹の高(高)いは雨(雨)の降(降)るし。虹が高(高)い空にかかるのは雨の前兆。(安芸三津漁民手記)
- (15) 虹の低(低)いは風(風)の吹(吹)くし。虹が低い空にかかるのは大風の吹く前兆。(安芸三津漁民手記)
- (16) 虹の終(終)わる所(所)に金山(山)がある。虹の末端の直下には金の脈がある。(秋田県鹿角郡俗信集「方言と土俗」一七)
- (17) 月の色(色)が青(青)いのは虹(虹)のたつ前兆(前兆)。(天候に関する俗説)
- (18) 月の暈(暈)が重(重)なるときは必(必)ず大風(大風)が起(起)くる。天候に関する俗説。
- (19) 月の暈(暈)に星(星)が入(入)れば人(人)が死(死)ぬ。(岩手県九戸郡俗信集「方言と土俗」一八)
- (20) 月の暈(暈)は月中(中)日(日)の暈(暈)は日中(中)。(豊前宇佐地方の俚諺「風俗画報」四一九号)

私註(一)『故事・俗信・ことわざ大辞典』(二)「にじ」(虹) (三) 故事・俗信・ことわざ辞書(四)? (五) おおむね未詳(六) 尚学 図書辞書編集部言語研究所編『故事・俗信・ことわざ大辞典』(昭 57・小学館) (七) 散在

〔八〕『定本柳田国男集』第二十一卷―新装版―(昭46、筑摩書房) に、

(24) 朝虹養ほごせ、夕虹に養を巻け (福島)

(25) 上川虹に川越すな (福島)

(26) 月に雨笠日笠なし (熊本県阿蘇)

(27) 日がさ雨がさ、月がさ日がさ (広島県安藝)

がある。本質的にさほど差はないが補強資料に加える。

〔考〕、『故事・俗信・ことわざ大辞典』には、「七月に月食あれば 米の値が上がる」の脚注に「七月に虹を見れば米の値が高い」ともいう。――とある。(5) (6)の中に入れてもものかも知れない。

(1) (6)まで、いわゆる農諺で、(虹)が米を中心とした五穀・麻等 農耕産物の不作・凶作の前兆とされている。cf資料20。

日本(長崎・出島)におけるオランダ人の「天気見様」につい ては58参照。

にじ) [虹] ①にじ。(じーうじ)佐賀県890 熊本県

919 934 (じーじ)福岡県三瀬郡872 佐賀県887 神崎郡

891 長崎県053 894 熊本県天草郡936 (じーす)熊本

県919 934 (じーつさん)熊本県玉名郡919 (じーじ)熊

本県玉名郡058 (じーす)熊本県天草郡919 芦北郡934

(じーさま)様)長崎県南高来郡905 (ちーじ)

石川県河北郡・能美郡404 (にーじ)新潟県西頸城

郡385 (にーじ)東京都大島326 徳島県811 美馬郡816

愛媛県840 長崎県北松浦郡899 老岐島914 熊本県919 大

分県939 鹿児島県宝島980 (ぬーじ)沖縄県974 (ぬーじ)

ん)沖縄県石垣島996 (ぬじ)千葉県夷隅郡288 (岡)例

書紀・天武二年八月(北野本訓)「丙寅に法令(のり

のふみ)を造る。殿の内に大虹(ぬし)有り」(のー

ぎ)沖縄県旭間島996 (のーじん)沖縄県新城島996 (の

ぎ)秋田県130 (のじ)東国※020※035 盛岡※054 信濃

※036 青森県073 岩手県092 秋田県130 山形県139 福島

県176 茨城県093 栃木県204 群馬県244 千葉県301 神奈

川県三浦郡313 新潟県385 山梨県461 長野県491 静岡県

田方郡529 (岡)例)万葉・一四・三・四一四「伊香保ろの

やさかの堰(るで)に立つ努白(のじ)の頸(あらわ)ろ

までもさ寝をさ寝てば」(びーじ)兵庫県佐用郡054

岡山県042 (びーぶ)島根県出雲726 (びーじ)島根

県726 岡山県042 邑久郡761 広島県774 779 (みーじ)新

高知県861 大分県大分郡・北海部郡941 (みーじ)新

潟県347 富山県婦負郡396 砺波397 石川県062 064 113 三重

県南牟婁郡603 京都府620 兵庫県649 和歌山県日高郡

698 島根県726 山口県792 阿武郡796 香川県伊吹島・

豊島054 愛媛県宇摩郡049 高知県高知市050 長岡郡889

通 考

府竹野郡⁶²（みよーじんさん）兵庫県但馬⁶²（みよ
じ）石川県河北郡⁶² 三重県南牟婁郡⁶³ 滋賀県伊香
郡⁶⁸（むーじ）沖縄県黒島⁹⁶（めうじ）愛媛県宇摩郡
⁶⁹ 福岡県⁸⁷（めーうじ）福井県⁴³（もーき）沖縄県
小浜島⁹⁶（もーき）沖縄県石垣島⁹⁶（ゆーじ）西園
※²⁰ 佐賀県藤津郡⁸⁹⁵ 長崎県⁸⁹⁸ 熊本県球磨郡⁹¹⁹
（ゆーじん）沖縄県石垣島⁹⁶（ゆじ）熊本県球磨郡⁹¹⁹
（りーじ）福岡県浮羽郡⁸⁷² 佐賀県⁸⁸⁷
（こ）虹¹⁷⁹⁰

（こ）が立（た）（こ）にじが空に架かる。にじが出
る。京都※²⁵ 岩手県上閉伊郡⁹⁷ 長野県南佐久郡
⁵⁴ 文獻例 大木一 九「雨はるる峰のうき雲うき散
て虹たちわたる冬の山さ」と（にじが吹（ふ））仙
台「虹がふいた」※⁵⁸ 江戸※²⁵ 神奈川県中部³¹⁴
（にじふく）奈良県南大和⁶⁸³ 文獻例 出観集「夏雨
晴れて入口の雲に虹ふけば、はだみ寒しも谷の夕
風」（にじが張（は）る）仙台※⁵⁸ 山形県村山¹⁴⁴ 茨
城県⁶⁶²
にじの小便（しょーべん） 日が照っている時
に降る雨。徳島県⁸¹¹

私註（一）『日本方言大辞典』（二）にじ（虹）（三）日本方言辞書
〔四〕？〔五〕？〔六〕尚学図書編『日本方言大辞典』（平一、小学
館）〔七〕P 1789

〔考〕にじが「立つ」・「吹く」の他に、「張る」の方言のあること
に注意。「天弓」の系譜が匂う。cf. 『医家千字文』（一四九）「にじ
の小便」は、「にじ」が動物的に受容されている証である。

微視的な考察は、各資料の〔考〕のコメント的記述に譲って、こ
こでは比較的巨視的なスタンスから、要約・考察しておきたい。

一、〈虹〉は大和系日本語では、『万葉集』の〈虹〉の万葉仮名が
〈努自〉であり、「努」は上代仮名遣いとしては、甲類の「の no」で
ある。上代の辞典・音義類は、中国よりの引き写しで、漢字の発音
を反切によって示してあるのみである。辞書でみる大和系日本語の
発音は『倭名類聚鈔』（一四四、平安中期）によって知られる。それに
は「和名爾之」とある。よって上代は「ノジ」、以後は〈ニジ〉と音
声的に変化。以下、総括して〈ニジ〉とする。

二、〈ニジ〉の表記漢字、すなわち外来語としての〈ニジ〉の漢字
は、すでに上代より中国の『爾雅注疏』（一四八）・『釋名』『釋文』を
ソースとして引き写された中国仏典の音義（例一四九）が輸入され、そ
れらよりさらに引き写的に移入されていた。そして、その種類は、
ほぼ、古代中国の南方系の文化を担う〈虹蜺（霓）〉と同北方系の
〈蜺蜺〉に集約され、さらに中古以降は前者が重用され、後者は軽視
される傾向にあった。上代の四〇に見られた、遊牧民族にその淵源を
もつと思われる（cf. 「比較研究資料・通考」）〈天弓〉も、江戸期の
『倭漢三才圖會』（一六二）の脚注にそつと記されるのみで、ほとんど
影をひそめてしまった。量的にみても、比較研究資料二と照応して
みれば知られるごとく、中国と比べれば圧倒的に少ないということ
が知られる。しかし、〈虹蜺（霓）〉、さらに淘汰されて〈虹〉と一本
化されつつも、総ての時代を通じて辞書・類書・類に何らかな形で
登載されていたことも事実である。すなわち、知識階級に属する層

を含む日本文藝の作者らは、辞書・類書・類を通して(ニジ)について何らかの知識的享受は可能であったことになる。

三、総じて、古典世界、近代以前は、言語的・内容的両面において、古代中国文化の影響が色濃い。しかし、これは質的な面のこと、量的ポリユーム的な面からみると、非常に貧弱であると言わざるを得ない。その享受がプラス志向にしろマイナス志向にしろ、中国におけるそれほど華々しくはないのである。例えば、中国古代において有名な(虹)に対する一享受の「白虹貫日」思想の記述も見出し難い。しかしこれは、実際にはわが国の『源氏物語』や軍記系文藝にしばしば、かなりの重みを持つて登場するものである。とすると、このような中国文化は輸入された、海彼すなわちあちらの緯書・史書・類書、よりの直接の披見によったものであろう。これはマイナス志向の一例であるが、プラス志向の(虹)の「吐金」思想においてもそうである。(これはグローバルに広がっていた「虹脚埋宝」伝説と同質のものであるが)『竹取物語』の深層にかかわり、『日本霊異記』(第五)中の(ニジ)の比喩のイメージの中に生きている。

四、内容を文化的質面より見れば、古代中国の(虹)観は、後代より見れば、おおむね(非科学的)——原初的認識(Ⅱ動物的)が濃厚——であったが、本稿の資料よりすると、かく、中国文化の影響下にあったわが国において、一方すでに(科学的)認識・享受の萌芽が、光科学の祖・ニュートン(ニュートンは、日本でいえば近世中期)を遙かに遡上る時期、すなわち鎌倉時代に見られるという面もある、ということとは興味深い。これを系譜的にみると、

48—52—62—65—66—
である。明治以後、すなわち文明開化により怒濤のごとき西欧文明

の流入をみた、(ニジ)の記述が、それに沿って科学的であることは至極当然であろう。

五、(ニジ)の異名は、英語などでは、(レインボー)に対して(アイルリス)があることは周知である。そこでわが国の異名についてみると、藤原長清のの編んだ『夫木和歌抄』の著名な分類よりの知識から「をふさ」を掲げ(cf. 60)、また掲げつつもやや疑問視している感のあるもの(cf. 69)も見られるが、アストンにもその先蹤が見られ、稿者が仮想・目論んでいるメタファーまたは見立てによる異名「天の浮き橋」、進めて「夢の浮き橋」、また(蜺)すなわち古代中国の(雌ニジ)の文藝化された「天人・天女」系の記載は見られない。

六、古典和語では、(ニジ)は、「たつ」または「ふく」と言っていた。「たつ」は資料に散見される「立つ」ではなく、「この世ならぬもの・神威あるもの、の顕現」を意味する「顕つ」であろう。よって(ニジ)のことを時に(たちもの)ともいう。「ふく」は「吹く」。中世、西欧人の目でみた血と涙の結晶たる「日葡辞書」(Ⅱ54)では、「たつ」とあるが、『増補俚言集覧』(Ⅱ63)によると、「たつ」は京都にて、「ふく」は江戸にて——とあり更に細密である。『医家千字文註』(Ⅱ49)に「張虹蜺」とあり、東北の一部では「張る」という所もあるが(Ⅱ70)、これには弓型発想の匂いがある。現代よく使われる「橋」型発想に絡む「かかる(架かる)」や、単純表現の「出る」は古辞書には見られない。その他、近世の古法帖に「吐虹」、すなわち「吐く」という言葉が見える(Ⅱ63)が、これは蝦蟇と関係のあるもので中国直輸入の表現であろう。(cf. 12←48)

七、俚諺・農諺等は、中国よりの移入も一部あろうが、中国のそれと似ている所もあるが、似ていない所もある。資料の性質上、経験的な面の作用が多く、また風土の違いに基因するものでもあり、

当然の成り行きであろう。

八、(ニジ)の色の「種類」・「数」についての記載は、近代以前の、いわゆる古辞書・類書には見出し難い。明治に入って、『言海』の稿本あたりが、その嚆矢であろうか。

(ただし、古辞書・類書ではないが、近世の随筆『寓意草』(1750)『るか』に「虹のなすぢ」と出ている。このことについては後稿資料¹⁰⁰の所で、やや詳述する予定である。)

(本稿の引用資料閲覧に関し、犬飼守薫氏、塩村耕氏、広岡義隆氏より便宜をたまわった。多謝。)

¹²……は、『椋山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。